

地域教材としての女堀

本 間 昇

- | | |
|-------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 開削当時を知る |
| 2. 女堀の概略 | 5. 現在の女堀を知る |
| 3. 女堀の教材的価値 | 6. おわりに |

—— 論文要旨 ——

女堀は、前橋市の桃ノ木川付近から佐波郡東村西国定にかけて全長約13キロメートルに及ぶ農業用水路の遺構である。発掘調査により、中世初頭に全線の工事が一斉に始まったものの工事途中で中断されていることが確認されている。廃棄後の女堀は、堀の埋没が進んだ帯状に延びる低地と、堀の両側に排土を積み上げた土手がほぼ全線にわたって残された。しかし、戦後の大規模な開発により遺構は急速に失われていった。

筆者は学校で学習する社会科教材の中で、「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」として、用水路の開削事業やその業績が重要視されている点に着目した。女堀は、群馬県内の用水路の中でも、その古さや未完成であることなど様々な点から郷土の歴史として注目されてきた。そこで、特に発掘調査が行われている用水路であるということを中心に、女堀の教材的価値を検討する。

本稿では初めに、発掘調査以前の諸説と発掘調査で明らかになった事実という観点で女堀に関する研究の概略に触れる。

次に、女堀に関する教材研究の具体的事例をあげる。一つは、開削当時の様子を知る資料として調査報告書の中にある写真資料をいくつかの観点で取り上げる。二つめは、現在部分的に残された女堀遺構を実際に見学するということを前提に、取水点から終末点に向かってそれぞれの見学ポイントを紹介する。

キーワード

対象時代	中世
対象地域	赤城山南麓
研究対象	地域教材

1. はじめに

女堀は、前橋市の桃ノ木川付近から、佐波郡東村西国定にかけて約13キロメートルにわたり遺構が残る中世初頭に掘られた農業用水路である。現在は、堀を掘削した土を積み上げた土手と、堀が土砂で埋まった幅20～30メートルほどの帯状の低地が部分的に見られる。

佐波郡赤堀町の南東の隅には女堀という小字がある。筆者は数年間その地に暮らしていたが、その地名がかつての用水路から付けられたという話を聞いてはいたものの、そこには水路の存在を確認できるようなものはすでに何もなく、遺構のそばに住んでいるという実感は全くなかった。一方、同じ町内でも粕川の西側に行くと、女堀の高く積まれた土手がかなりの長さで残っていた。

筆者は教員生活を経て当事業団に勤務するようになった。そこで女堀は発掘調査が行われた農業用水路遺構であることを知るとともに、調査報告書を読んだり現地見学会に参加する機会を得た。さらに、ここで得た知識や経験の中から女堀に関して地域教材として活用できるものがないかと考えるようになった。

平成10年度改訂小学校学習指導要領では、3、4年生の社会科の内容に「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。」という項目がある。その中のひとつが主に4年生で学習する「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」である。この内容を学習するため、各教科書会社では全国から具体的事例を選び出し教材を作成しているが、群馬県内で採用する5社の教科書全てが用水路の開削について取り上げていることに着目した（P108参照）。さらに、地域教材を学習するために各市町村ごとに作成している社会科副読本でも、多くの市町村で先人の具体的事例として用水路の開削を取り上げていることがわかった（P108参照）。以上のことから、社会科の地域教材として用水路の開削は重要な位置を占めていることがわかる。4年生の社会科にとどまらず、平成14年度より本格実施された総合科により、小中学校を通して地域教材を取り上げる機会は増えていくと考えられる。

一方、近年の開発により女堀の遺構は急速に消失しており、古くから地域に住む人々の記憶からも消えつつある。さらに若い世代の人々にとっては、その存在もあまり知られていない。

そこで、本稿では地域教材のひとつとして用水路遺構である女堀の資料的価値を検討したい。さらに、女堀の発掘調査報告書の中から活用できる資料を選ぶ、実際に現在残された女堀遺構を歩いてみるという、用水路に関する地域教材研究の一環として女堀という資料を活用することを提案する形で記述していきたい。

2. 女堀の概略

県内の多くの用水路に比べると、開削当時を知る文献資料が全くない女堀は、伝説や言い伝えにより、開削年代、開削の主体、その目的などについても様々な説があり確定できない部分が多かった。一方、昭和50年代に発掘調査が行われたことにより、多くの謎が解明されることとなった。

そこで、発掘調査以前の諸説と調査で解明された事実という視点で女堀の概略を以下にまとめてみる。

(1) 発掘調査以前の諸説

①女堀という名前の由来

- ・女性が政治を司っていた時代に開削したため、名付けられたという伝説（推古天皇または北条政子の時代）
- ・男性が戦に出かけていなかった時に女性が掘ったという伝説。
- ・女性だけでかんざしで一晩にして掘ったという伝説。
- ・県内さらには埼玉、東京、長野にも女堀と呼ばれる溝状の土地が存在する。それぞれすでに用水路として利用されていない点で共通しており、廃棄されたという意味で姥（おうな）堀という語を用い、後に女堀に転化したという説。

②開削の時期

・古墳時代説

推古天皇の時代という伝説を元にした説。また女堀の土手に隣接して古墳状の土山があることを根拠とする。（前橋市荒砥地内）

・平安時代終末説

女堀の終末点が、12世紀に成立したかつての荘園である新田荘、瀧名荘の方向にあることと関連づけた説。

・鎌倉時代説

北条政子の時代という伝説を根拠とする。

③開削の主体

・推古天皇、北条政子説

女天下の時代に開削という伝説を根拠とする。

・国衙説

その規模の大きさから、荘園を越えた国家レベルの工事だったという説。

・新田氏説

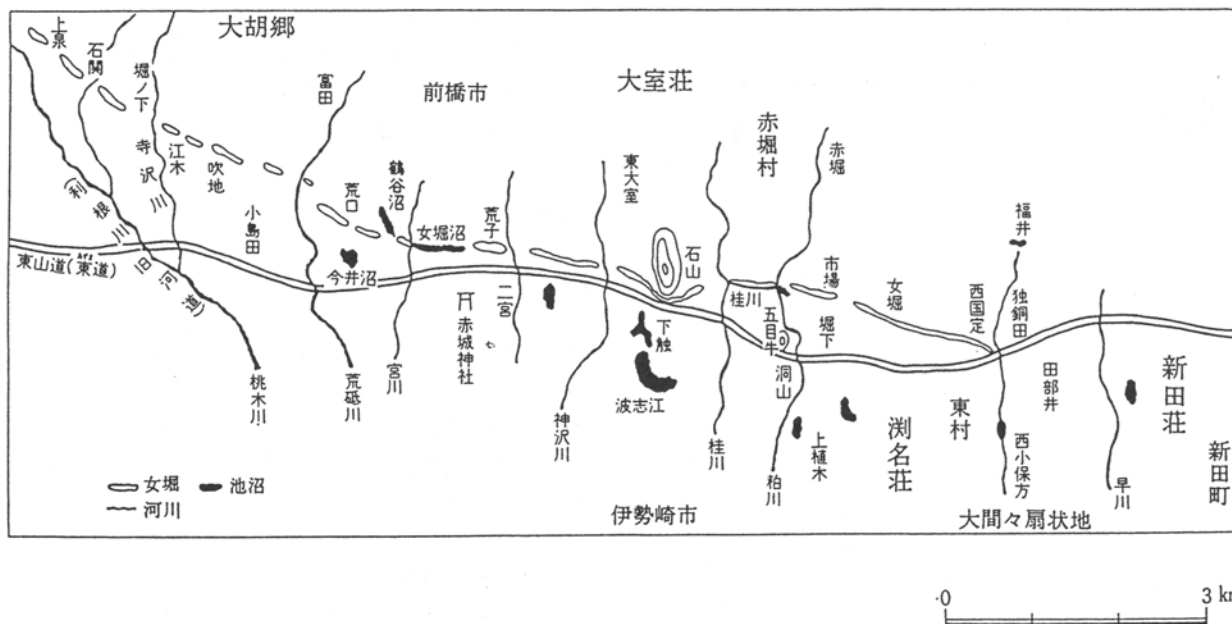
取入口付近は、新田氏の支配下にあったという説。

女堀の流路に鳥山、村田、市根井（市野井）など新田荘内の集落名と同じ名字の家が点在するという説。

・瀧名氏説

女堀の終末点、東村西国定がかつての瀧名荘の領域にあたるためという説。

女堀の流路途中にあたる大胡郷、大室荘は、終末点



女堀通過点略図（「女堀 一中世初期・農業用水社の発掘調査」から引用）

の渚名荘と同様秀郷流藤原氏の系列による支配で、協力を得やすかったという説。

④目的

・溜井説

規模の大きさから、用水路だけではなく、水をためて近くの河川に補給するために利用したという説。現在も赤城南麓には数多くの溜池が存在する。

・運河説

規模の大きさから、船の航行する運河としても活用したという説。江戸時代開削の東京都にある玉川上水は、明治期に一時運河としても活用されていた。

・防御用空堀説

延々と続く土手から、外敵を防ぐための防御用施設で、通水しない空堀だったという説。

・農業用水路説

渇水に悩まされる大間々扇状地へ農業用水を引き込んだという説。

中世に荘園の拡大に伴って造られた農業用水路という説。

(2) 発掘調査により解明された事実

①未完成で廃棄された用水路（名前の由来）

- ・工事中の区域の検出から

調査では、女堀の掘削工事が完了している区域とともに工事途中の区域が検出された。このことから、女堀は完成前に工事が中止になったことがわかった。堀は一度も通水されず、その後土砂が堆積していった。女堀と名付けられた時には、すでに堀は埋まり、廃棄

された堀という意味で名付けられた可能性が高い。

・水路の勾配から

女堀は、13キロメートルという距離に対して、取水点と終末点の標高差は約4メートルと極端に傾斜が緩い用水路である。調査により、下流の方が標高が高くなっている区域もあらわれ、測量の失敗という点からも通水できない用水路であったことがわかった。

②開削の時期を12世紀中葉に比定

・浅間B軽石層の発見から

発掘調査により、女堀の土手の下からは火山灰が混じった土壌を耕作した畝が発見されている。さらにその下には1108年（天仁元年）の噴火で堆積した浅間山の火山灰（浅間B軽石）の層が発見された。

時間を順に追うと、女堀の周辺では1108年の浅間山の噴火後、堆積した火山灰を耕作し畠として利用しはじめた。耕作を始めて間もない時期、まだ畠の耕作土に火山灰が混じっている頃、女堀の掘削が始まった。畠の一部は堀の掘削で出た土が積み上げられ土手の下に埋もれてしまった。このことから、女堀の開削時期は1108年から間もない時期、12世紀初頭から中葉と考えられた。

・自然科学分析から

発掘調査では、女堀の土止めに利用されたと考えられる木杭が出土している。この杭は、自然科学分析によって1060～1180年の間に伐採されたものと1100年～1250年の間に伐採されたものという測定結果が得られている。

③開削の主体を瀧名氏と推定

・開削年代から

開削年代が、12世紀中葉と確定したことにより、女堀の終末点にあたる東村西国定付近は、当時瀧名氏が莊園を拡大していた時期であったことがわかる。このことより瀧名氏の開削と推定された。

・水路の特徴から

調査により女堀の水路は、流路途中の大胡郷、大室莊へは分水することなく、瀧名莊に位置する終末点のみに送水する目的で掘られていることが解明された点からも瀧名氏開削説が補強された。

④目的は農業用水路

・水路の形状から

現在、遺構として残る女堀は、本来の水路が多量の土砂の堆積により埋没してしまい、当時の姿をとどめていない。

発掘調査により解明された本来の女堀の形状は、深度を維持するため底部の幅が20メートルほどの広い堀を掘削した後、さらにその中央に通水のための幅5メートルほどの溝を掘りこむというものであった。この通水溝の形状から溜井、運河、空堀などの説は否定され農業用水路であったと確定された。分水のないこの用水の受益地は終末点から南に広がるかつての瀧名莊に属する水田地帯であったと推定されている。

3. 女堀の教材的価値

女堀については、赤堀町の社会科副読本ですでに大正用水とともに地域教材として取り上げられている。他の市町村については、地元を流れる用水路について学習することが最適であろう。しかし、以下のような点から他市町村においても女堀を参考資料とすることで、指導の幅が広がると思われる。

(1) 県内最古級の用水路として

県内の市町村で扱う地域教材としての用水路は、近世以降に開削されたものが圧倒的に多い。中世初頭に開削されたことが発掘調査で解明されている女堀は、県内で開削時期がわかっている用水路としては、最古級のもので資料的価値が高いと考える。

(2) 発掘調査された用水路として

近世以降に開削された用水路の多くは、現在もなお利用されている。それだけ利用価値が高いことがわかる反面、護岸工事など改修が繰り返され、開削当時の形状をとどめているものは希である。そのため、教材として伝えることのできる内容についても、文献資料で記述されていること以外は、伝説や言い伝え、想像図に頼らざる

を得ない場合が多い。

一方女堀は、用水路遺構を広い範囲で発掘調査した全国でも珍しい例である。そのため、開削当時の様子を知るための写真や図面など客観的な資料が豊富である。

(3) 中世の土木工事を知る資料として

女堀は発掘調査により、工事途中で廃棄され一度も通水されたことのない未完成の用水路だったことが解明されている。その理由は、調査区域の中でも、すでに掘りあがった区域とともにまだ工事中の区域が発見されたためである。工事中の区域からは、当時の土木技術、工事の手順、作業体制、労働の様子などが解明されており、他の通水された用水路からは得られない貴重な資料が活用できると考える。

(4) 大規模開発の失敗事例として

教材として扱われる用水路は、先人たちが苦勞の末に工事を成し遂げ人々の生活を豊かにしたという事例である。一方、女堀は当時としては大規模な開発であったものの、何らかの理由で工事が中止になった用水路である。先人たちの功績と対比し、失敗の原因を考え未来に生かすという意味でも貴重な資料であると考えられる。

(5) 遺跡の活用事例として

戦後、圃場整備や宅地、工業用地の造成などの開発が進み、女堀の土手は多くの部分が削平され、堀跡も埋められていった。一方、現在も残る遺構に目を移すと、河川、観光用しょうぶ園、公園、養鯉池、釣り堀、墓地、神社など開削当初の目的とは異なる用途で利用されている場所が多いことに気付く。新たな目的で利用されることで消失を逃れているとも言えよう。そこで、遺跡の活用例としての資料価値もあると考える。

(6) 前橋市の参考教材として

前橋市では、地域教材として副読本の中では天狗岩用水が取り上げられている。天狗岩用水は、利根川を取水源とする江戸時代に開削された用水路である。利根川の西側を現在も南に向かって流れる天狗岩用水は、前橋市西部の人々にとっては、なじみのある用水路であろう。

一方、さらに古い時代に開削され、桃ノ木川付近から東に向かって遺構が残る女堀は、天狗岩用水との比較対象としての資料価値があると考えられる。

また、前橋市東部に住む児童生徒にとっては、地元に残り見学も可能な女堀は、天狗岩用水よりもさらに身近な存在であると考えられる。

4. 開削当時を知る。(報告書の活用)

現在、見ることでできる女堀の遺構は、埋没が進んだ姿であり、開削当時の形状とは異なる。開削当時の様子を知るためには、発掘調査結果がまとめられた報告書から写真を中心とした資料を得ることが最適であると考え

る。「女堀—中世初期・農業用水社の発掘調査— 県営圃場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1984群馬県埋蔵文化財調査事業団」の中から主な写真資料をいくつかの観点に分けてみる。

(1) 完成した姿を知るための資料



〈前橋市飯土井地区の完成した女堀の姿〉

手前を見ると幅の広い溝を掘った後、その中央にさらに通水のための溝が掘られている。土手は、調査を経て削平されている。奥の方は、まだ調査しておらず両側の土手が臨める。左側の木の繁った土手が南側。女堀は通常南側の土手の方が高くなっている。これは、ある程度掘り進むと、北側の壁からは、赤城山の側から湧く地下水が流れこんでくるため、掘り出した土を南側にのみ積みよくなるためである。

(2) 開削時期を知るための資料



〈前橋市荒口地区の土手断面〉

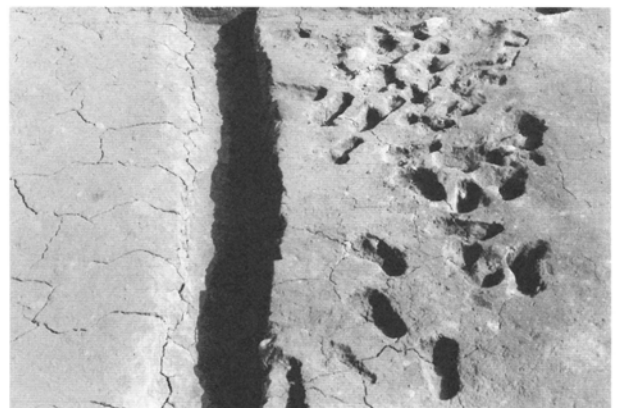
女堀の開削時期を解明する大きな手がかりとなったのが、土手の下にある浅間B軽石層の存在である。写真の一番上の厚い層が女堀の土手、2番目の黒く見える層が浅間B軽石が混じった畠の耕作土で、上面でゆるやかな波線を描くのが畝である。3番目に白っぽく見られる薄い層が、降下当時の浅間B軽石である。

(3) 作業をした人々の様子を知る資料



〈前橋市東大室地区の作業道〉

女堀の土手の下に現れた排土を運んだ作業道。堀を掘って出た土は、掘削が浅いうちは遠くに積み出し、深くなってくると近い場所に積めるよう合理的に運ばれた。畠を踏みつぶした幾本もの作業道からは、大規模な工事の様子が窺われる。

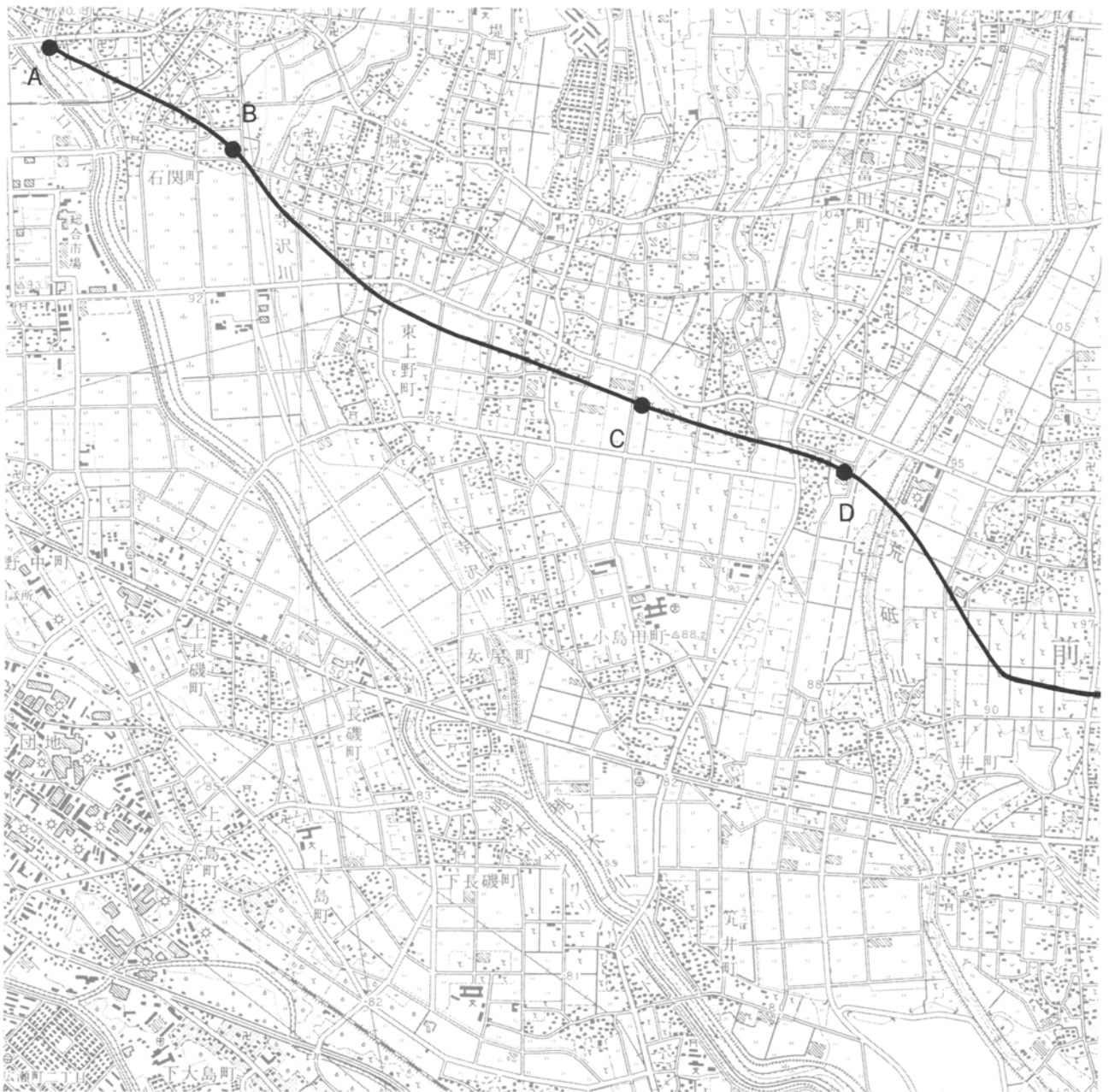


〈前橋市東大室地区の作業足跡〉

堀の底部から発見された無数の足跡。ぬかるみの中を裸足で土を掘り運び出した様子がわかる。当時の過酷な労働の様子を知ることができる資料。

このほかに、作業の様子を知るための写真資料として荒口地区前田の堀を掘削した際にできた鋤の跡などが見られる。また、工事途中の女堀からは、数人単位で作業するように分割した小間割という小さな作業区が発見された。

5. 現在の女堀を知る。(女堀を歩く)



女堀の位置と見学ポイント（国土地理院発行 1：25000地形図を元に作成）

(1) 地図から女堀の流路を知る。

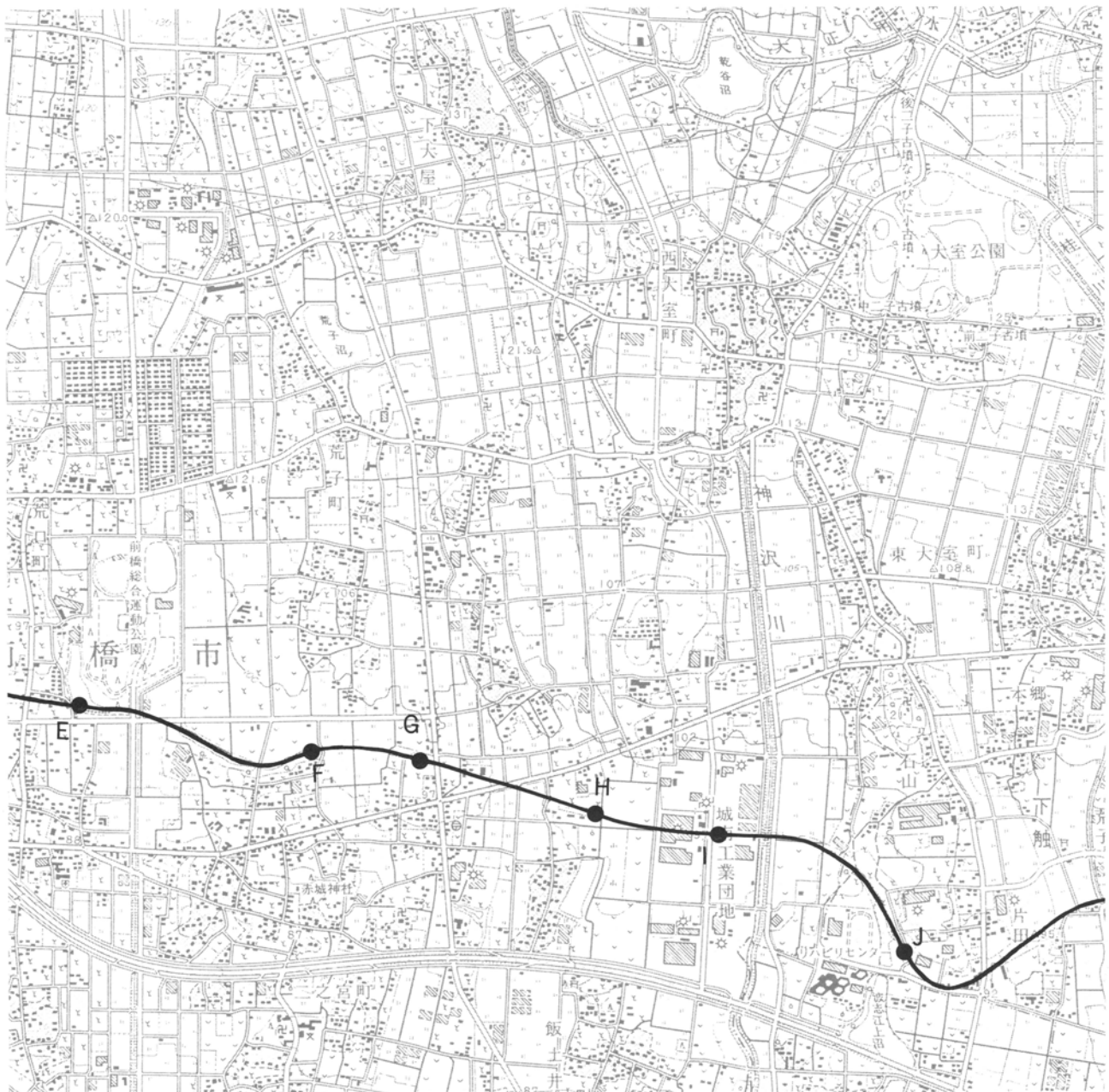
当事業団や県立図書館などで閲覧、複写が可能な明治18年発行陸軍参謀本部迅速測図を見ると、女堀の土手がほぼ全域にわたって見られ、流路を確認することができる。（P109参照）

現在の地図では、国土地理院発行 1：25000地形図の「大胡」と「前橋」の2枚に女堀の範囲が入る。多くの遺構が消失しているものの、上流より前橋市の堀之下町、赤堀町の堀下、女堀上、女堀下、女堀といった女堀に関連する地名が読みとれる。また女堀遺構に水を湛えた女堀沼、鶴ヶ谷沼や、埋没した堀跡に作られた道路幅ほど

の帯状の水田など、わずかに残った遺構も地図上で確認することができる。

(2) 現在の女堀を見学する。

戦後の開発によって、多くの女堀遺構は姿を消している。そこで、現在も部分的に残り見学することのできる女堀遺構を流路に沿って追ってみる。実際に女堀の遺構が良好な状態で見られるのは、荒砥川から粕川までの区間である。



①桃ノ木川から荒砥川にかけての区域

地図上のA、B、C、D地点が含まれる。

取水点の推定場所から始まるこの範囲は遺構の残存状態が悪く、取水点を確認できるものは残っていない。ただ一カ所、富田町で土手と埋没した堀跡を良好な状態で見ることができる。

②荒砥川から神沢川にかけての区域

地図上のE、F、G、H、I地点が含まれる。

女堀は、この区間途中の飯土井町で、国道50号線を横断する。国道50号線の北側では、鶴ヶ谷沼、女堀沼という後年の利用により水を蓄えた女堀の姿を見ることができる。

③神沢川から粕川にかけての区域

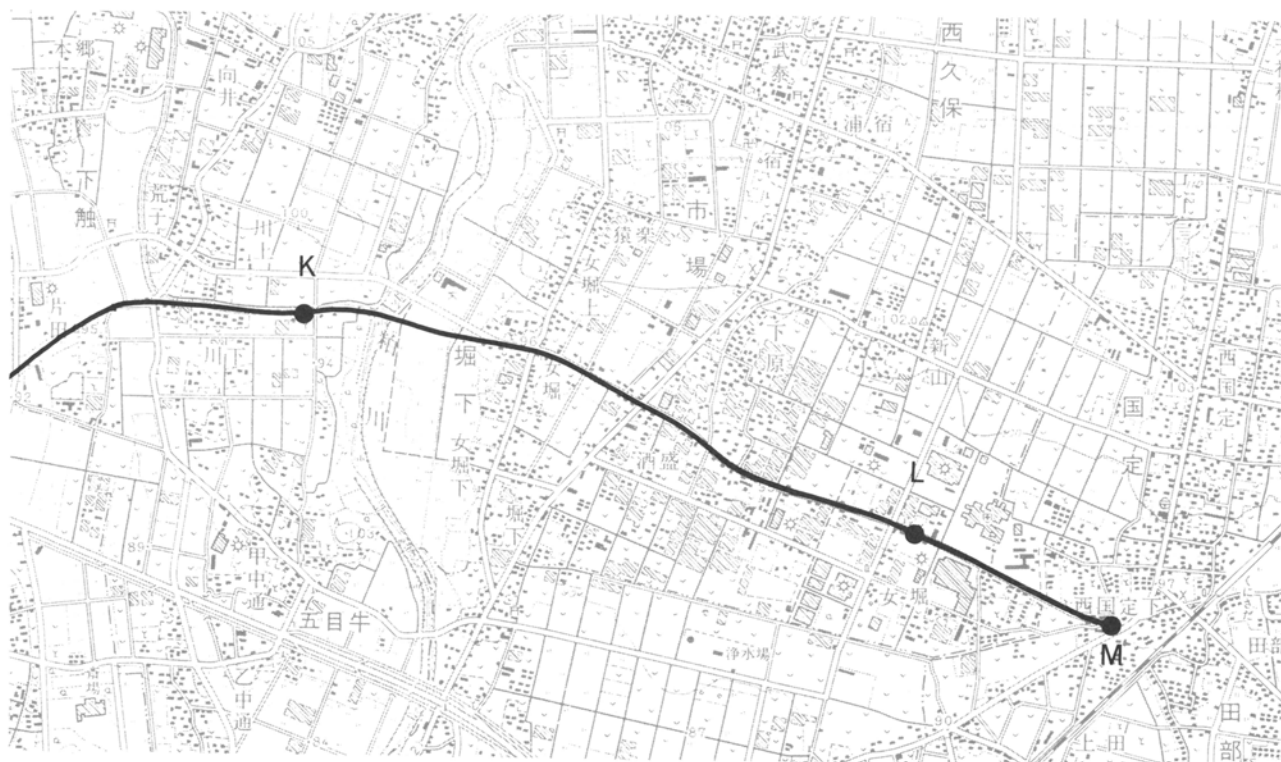
地図上のJ、K地点が含まれる。

神沢川を渡ると石山という丘陵地帯を避け流路が大きく南に迂回する区域がある。この区域は、最も遺構が良好な状態で残っており、広い範囲にわたって両側の土手と堀の跡が見られる。

④粕川から東村西国定にかけての区域

地図上のL、M地点が含まれる。

粕川から終末点にかけては、女堀の遺構がほとんど消失している区域で、現在は堀下、女堀などの地名として残る。



A地点 前橋市上泉町、桃ノ木川と藤沢川の合流点付近。

残存する遺構の延長線上にあり、地形的にも取水点と推定される地域。この近辺では、女堀の遺構は見られず、取水地も特定されていない。利根川の本流だったと推定される桃ノ木川を取水点とする説があるが異論も多い。



A地点近くの天神橋より桃ノ木川の上流を見る

B地点 前橋市石関町、上泉町との境界

取水点から下り、最初に見られる女堀の遺構。土手は見られないが、女堀の地割が残る。遺構に沿って二つの町の境界線がある。ここから下流はしばらく、赤城山南麓の傾斜地と広瀬川低地帯と呼ばれる平坦な土地との境に流路があったと考えられる。



B地点の女堀。住宅の間の低い水田の地割が堀跡。

C地点 前橋市江木町菅原神社付近



C地点の土手。墓地として利用されている。

この区域は、水田の中にわずかに女堀の土手が残る。土手の上に墓地があったため削平を逃れていると考えられる。江木町内には、このような墓地として残った土手が3カ所あり、赤堀町堀下の南小学校付近にも見られる。

D地点 前橋市富田町

取水点から女堀の下流に向かって、最初に見られる大規模な遺構である。県道藤岡大胡線の東にあり、約250メートルにわたり南側の土手と埋没した堀が良好な状態で見られる。他の区域でも北側より高く積まれた南側の土手の方が残存状況も良い。女堀跡と表示された標柱がある。



D地点。左側に見える高まりが女堀の南側の土手。

E地点 前橋市荒口町鶴ヶ谷沼

鶴ヶ谷沼は、女堀の土手で水をせき止め、溜池として利用されてきた沼である。現在は、総合運動公園の敷地内にあり釣り堀として整備されている。沼の南側には、現在も女堀の土手が残り、沼の水をせき止めている様子がわかる。また、見学の際には公園内の駐車場が利用できる。



E地点。西から見た鶴ヶ谷沼。奥の枯れた木のある部分が女堀の土手。

F地点 前橋市二之宮町女堀沼

女堀沼は、堀の両側を塞ぎ、長さ約800メートルにわたり水を蓄えたものである。南北の土手が良好な状態で残る。特に、南側から見た土塁は隣接する民家の屋根よりも高い場所もある。沼は東西二つに分かれており、その間は土手を掘削した切り通しの道になっており、断面が観察できる。東側の沼は、最近まで養鯉池として利用されていた。女堀遺跡と表示された標柱が沼の周りに数カ所ある。



F地点。東から見た女堀沼。養鯉場の跡。

G地点 前橋市二之宮町、荒子町との境界

国道50号線の二之宮町信号を北に折れ、300メートルほど進むと道路の西側にやや低くなった女堀の地割が水田となって帯状に延びている。その先にはわずかに残る南側の土手を臨むことができる。鳥居を前にした土手の上には、霊符神社の小さな祠が祀られている。この区域も女堀の遺構が二之宮町と荒子町とを分ける境界線となっている。



G地点。南側にわずかに残る土手とその上に祀られる霊符神社。

H地点 前橋市飯土井町国道50号線南側

女堀の遺構は国道50号を南に横断し、飯土井町へと入る。この区域では、南北の平行する土手と堀跡が良好な状態で見られる。また、北側の土手は、一部が土取りのため削り取られており、断面が観察できる。遺構が残った部分の東西の両隅には、女堀跡と表示された標柱が立てられている。



H地点。東から見た飯土井町の女堀。右側の土手が削り取られている。

I地点 前橋市東大室町城南工業団地内

工業団地を南北に走る道路と神沢川の間、女堀の両側の土手が良好な状態で残されている。埋没した堀の部分にはベンチが設けられ公園のようになっている。入口には、国指定史跡女堀を表示する標柱と前橋市教育委員会が設置した女堀の解説板がある。解説板は、説明とともに断面図も描かれており、埋没の様子と開削当時の女堀の形状を知ることができる。



I地点。前橋市教育委員会設置の解説板。

J地点 赤堀町下触の赤堀しょうぶ園

最も長い距離にわたって遺構が残されているこの区域は、女堀の形状もよく残っており見学に適する場所である。また、ここでは石山の丘陵を避け、流路が大きく南

に迂回している。現在女堀跡は、埋没した堀の部分を利用し、赤堀しょうぶ園として一般公開しているため、土手の上も安全に歩くことができる。園内は木道が整備されシーズン中は大勢の観光客でにぎわう。赤堀町教育委員会により、女堀についての解説板が2カ所、史跡の範囲と断面図が描かれた案内板が1カ所、設置されている。また観光用の駐車場も2カ所設けられている。



J地点。冬の女堀を南から見る。中央の低地に花菖蒲が植ええられる。

K地点 赤堀町下触の桂川

この地域を南流する桂川は、急に東に向きを変え粕川へと流れこむ。この東に向きを変えた1キロメートル弱の区間が女堀の遺構である。この区間は、南へと流れていた桂川が、昭和19年の台風で氾濫したため、東西に走る女堀の溝に流路を付け替えたもので人工的な河川である。災害防止のために女堀を有効に活用していると言える。一部削られた部分があるものの南側の土手が現在も良好な状態で残る。土手の南側に沿った家に住む方の話によると、土手とその上の木々は北風を防ぐ働きがあるそうだ。



K地点。桂川を東から見る。

L地点 赤堀町市場女堀の民家

この付近は、終戦後満州から引き揚げた人々が開拓した地域である。女堀の土手も開拓や病院、工場の建設により削平されていった。粕川以東でただひとつ残ったわずかな土手が民家の敷地内にある。終末点に近く掘削も浅かったためか土手の高さは1メートルほどである。開拓者として入植したこの家でも、徐々に、近所で土手が削平されていく様子を見て考えていたところ、数少なくなった貴重なものなので是非残すようにと助言してくれた老人がいたそうだ。個人の敷地内にあり、道路に面した垣根の間からわずかに観察することができる。現在の道路がかつての堀跡である。



L地点。民家に残るわずかな土手。

M地点 東村西国定の終末点

東に向かってきた女堀は終末点で南北に延びる独鈷田と呼ばれる帯状の低地と合流する。この区域では現在の女堀は、M地点も含め堀跡の上が舗装された道路となっており、女堀の痕跡は見られない。しかし、昭和40年代までは、堀の名残が見られる未舗装の窪んだ道で、わずかに両側が高まっている所もあったという。



M地点。終末点から上流方向を見た女堀。道路の下に流路がある。

工事が成功した場合、女堀の終末点となるはずであった東村国定地区は、昭和初期まで「正月は、国定までも米の餅」(大正用水史)などと川柳に詠われた地域だったという。これは、めでたい正月は、普段あまり米がとれない国定地区の人々でさえ米の餅を食べるというものである。つまり、この地域は女堀の工事が中止になったその後も常に水不足に悩まされ、近年まで安定した稲作ができなかったことがわかる。

この地域に安定した農業用水の供給が行われるようになるのは、大正期に計画され終戦後にやっと通水されることになる大正用水の完成まで待たねばならなかった。

様々な問題を抱え、工事が完成しなかったと考えられる女堀であるが、その後800年近くもこの地域は、用水の不足に悩まされてきたことを考えると、単なる工事の失敗例というだけでなく、長年にわたる地域の人々の願いを象徴する遺産であると考えられる。

5. おわりに

本稿は、指導者が地域教材で用水路を扱う際の参考資料として女堀を紹介するという目的で執筆したものである。特に、昭和54年～56年に行われた発掘調査の結果を重点的に取り入れた。地域教材を素材のまま教室に持ち込み教えることは難しく、児童生徒に合わせた教材化が必要であろう。そこで、女堀については、まず教師が本誌をもって、一度歩いてみることを勧めたい。教師にとっても、女堀の踏査は遠い昔に思いを馳せることのできる教材であるからである。

発掘調査によって女堀に関する多くの謎が明らかになった。しかし、取水点の位置や、開削の主体などは推定とされており、用水路が途中の河川をどのように横断したかなど解明されていない課題も残されている。今後も女堀に関する論争は続くだろう。地域教材としての女堀を考える中で、課題の解明に注目していきたい。

本稿を執筆するにあたっては、能登 健氏 小島 敦子氏には多大のご教示をいただきました。誌上を借り、感謝の意を表します。

本研究は、平成14年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の職員自主研究活動の一部である。

群馬県内で用水路の開削を扱う社会科副読本の一覧108



明治時代の女堀 明治18年発行陸軍参謀本部迅速測図〔「大胡門」から〕

引用・参考文献

- 赤堀町教育委員会 1986 『中畑遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報―村営
下触土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告―』
- 赤堀町教育委員会 2002 『わたしたちの赤堀町』
- 赤堀村誌編集委員会 1978 『赤堀村誌』
- 東村誌編纂委員会 1979 『東村誌』
- 群馬県教育委員会文化財保護課 1980 『昭和54年度女堀遺跡詳細分布
調査実績報告書 女堀』
- 群馬県史編さん委員会 1990 『群馬県史』通史編 原始古代1
- 原 雅信 1985 「女堀の研究史」『女堀―中世初期・農業用水社の発掘
調査―』
- 迅速測図原図復刻版編集委員会編 1991 『明治前期 手書彩色関東実
測図 第一軍管地方二万分一迅速測図原図復刻版』
- 教育出版 2000 『社会 4年下』
- 前橋市史編さん委員会 1971 『前橋市史』第1巻
- 光村図書 2000 『社会 4年下』
- 文部省 1998 『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局
- 日本文教書籍 2000 『小学生の社会 4年上』
- 能登 建 峰岸 純夫編 1989 『よみがえる中世5』平凡社
- 大阪府立狭山池博物館 2002 『重源とその時代の開発』
- 大阪書籍 2000 『小学社会 4年下』
- 東京書籍 2000 『新しい社会 4年上』
- 丑木 幸男 1983 『大正用水史』大正用水土地改良区
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『女堀―中世初期・農業用
水社の発掘調査―県営圃場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文
化財発掘調査報告書』